



TITLE:

[書評] 松原朗著「中國離別詩の成立」

AUTHOR(S):

川合, 康三

CITATION:

川合, 康三. [書評] 松原朗著「中國離別詩の成立」. 中國文學報 2004, 67: 100-107

ISSUE DATE:

2004-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177934>

RIGHT:

書 評

松原 朗著

『中國離別詩の成立』

川 合 康 三

京都大學

中國古典詩が日常の生活のなかから作られることは、ことに西歐文學と異なる性格として、しばしば指摘されてきた。ふだんの暮らしのなかで生起する事柄を内容とし、ともに生活する人々との交わりのなかで制作され享受される——中國の詩がそういうものだとしたら、別れの場面は絶好の詩材になる。事實、中國の詩には別れを唱った作品がとりわけ目立つことは、少しでも讀んでみれば誰でも氣付く。にもかかわらず、これまで別離の詩を正面から取り上げた專著はなかった。この本は中國の「離別詩」を對象と

し、その生成と變容の過程を時代に沿って解明した、おそらくは最初のものである。それは「離別詩」の全容を明らかにしたのみならず、おのずから中國古典詩そのものの展開を描き出すものともなっている。わたしたちは著者のねばり強い思考と張りつめた文體を通して、「離別詩」についても、中國の詩の全體についても、理解を深めていくことができる。

「離別詩」の展開を探求する著者には、人間や文化に對する一つの態度が前提となっている。

「人間は、自分で考えているほどに自由に、ものを考え、また感じたりするものではない。その實、時代の所與として存在している有形無形の「型」に制約され、反面またその「枠」によつて支持される中で、はじめてものを考え、また感じているのである。そしてその「型」は、外在的なものにのみ限定されるのではなく、社會に生きる人間の行動を多面的に支配している様々な（しかしそれ自體を形あるものとして取り出せない、その意味

で精神的と言うしかない）習慣も、この中に含まれてゐる」（あとがき）

こうした考え方に心地よい共感を覚えるのは、評者一人ではないだろう。文學、廣くは人間の文化に對してこのような觀念が共有されるところに、この本が「今」という時點で登場したゆえんが理解できる。研究のあり方にも時代の流れは當然反映されるのである。

とはいつても、著者はこうした考え方をあらかじめ用意して、それに基づいて「離別詩」の考察に向かった、という手順をとつたのではない。おそらくそれは著者のなかにおぼろげなかたちで存在していたのだろうけれど、「離別詩」の作品を読んでいくなかでひとりではつきりした輪郭ができていったのだろう。つまり借り物の觀念を援用したのではなく、作品に接することとそれに對する態度とが連動しているからこそ、著者の基本的な姿勢が有効に機能しているのである。「離別詩」という一つの「型」、それがしだいに形作られ、詩全體の動きと關わりながら變貌して

いくありさまを、説得力ある筆致で解明したのが本書にほかならない。以下、章を追つて紹介していきたい。

* * *

「序論——主題と様式」

建安から唐代に至る時期における「離別詩」の生成と展開を論じたこの本の全體を要約しながら、副題に「主題と様式」とあるように、文學作品のなかで主題と様式とは切り離しえない關係にあるという、著者の抱くもう一つの觀點を提示している。「離別詩」という具體的な對象の研究が、文學の主題と様式とが不可分の關係で展開していくことの一つの證左となることが説かれる。

I 部

「鮑照による離別詩の開拓——六朝期における離別詩の形成（上）——」

詩の實質的な始まりともいふべき建安の文學においては、「離別詩」は散發的に見られるものの、いまだ様式を整え

てはいない。西晉に至って、「祖道詩」が出現するが、それは應詔の詩であり、四言詩であるという特徴からもわかるように、儀禮的な場で作られるものに限られていた。

「祖道詩」の登場は離別という主題が一つの獨立したジャンルとして固まつてきたことを示すものではあるが、公式の場で作られたという制約のために文學性は高くない。

「離別詩」の展開に劃期をもたらしたのは劉宋の鮑照である。鮑照に至って、實際の別れの場に即した、その人、その場でなければ唱いえない感情がこめられるものとなった。

「永明期における離別詩の競作——六朝期における離別詩の形成（中）——」

齊梁に至って離別詩が増加するのは、詩が文學集團のなかで盛んに競作されるようになる變化の一つのあらわれである。そのために離別詩は個々の思いの表出よりも、別れというものの「客觀性の高い抒情」を唱うものになり、様式化が進む。そうしたなかにあつて謝朓ひとりとは風景の細部を取り込むことによって、個別的な別れの場を刻みつけ

ようとする。

「何遜と六朝離別詩の歸着——六朝期における離別詩の形成（下）——」

敘景の導入によって個別化へ向かつた謝朓を受けて、梁代では何遜が離別詩を六朝期の頂點にまで磨き上げる。離別の場を路傍の人から唱うという新しい視點、出征の別れという新しい題材、聯句によって離別を唱うという新しい形式——このようなかたちのうえでの新たな展開を指摘するにとどまらず、詩の分析を通して何遜が別れの瞬間に焦點を絞ることによって別れの悲しみを尖銳に表現しえたことを論じる。

「送別と留別——初唐四傑による「送序」の創出をめぐる——」

離別詩の歴史が唐初においてもつ最大の特徴は、それまでは未分化のままであつた「送別」と「留別」とが劃然と分かれたことである。それを促したのは王勃の創出した

「送序」であつた。「宴序」から「送序」が派生したことは、離別詩の活況と「送別」「留別」の分化をもたらし、當然ながら離別の感情もより細やかな表現が追求される。

「盛唐の臺閣詩人と送別詩の確立——張説から王維へ——」

送別詩が廣範な作者によつて作られるためには様式の安定が必要であり、その一つとして導入されたのは送られる人が旅行く道筋の敘景であつた。それは主に宮廷文壇のなかで洗練されていき、張説・蘇頌、それを繼承する王維によつて確立する。王維の送別詩では沿路の敘景は受け手にも共有される文獻に基づいて書かれ、安定した表現様式として定着するに至る。

II 部

「王昌齡離別詩論考」

上述のように離別詩が表現として安定した様式を確立していく過程は、一面では類型化の方向に向かうことになる

が、その流れと離れたところで獨特の離別詩を作り上げたのが王昌齡であつた。具體的な讀解を通してその離別詩の特質を明らかにする。

「送別における「送」と「別」——高適送別詩論考——」

「送別」と「留別」とが分かれ、「送」と題する詩がふつうになつていくなかで、高適の離別詩は「別」と題する。それは盛唐送別詩が類型化に向かい、しだいに窮屈な詩型になつていくことへの反發として、離別詩の新たな可能性を模索した試みであつた。

「大曆様式の超克——韋應物離別詩考——」

盛唐の王維によつて確立した離別詩は、大曆年間に頂點に達する。大曆十才子の離別詩は彼らの詩集の三割にも達するのである。數量の増加は様式化を一段と進め、固定した詩が量産されるに至る。そこから脱却しようとしたのが韋應物であつた。詩型のうへでは定型化していた五律とは別に五言古體詩を選び、沿路の敘景といったような様式化

していた手法を避けて荒涼とした敘景を選び、定型的送別詩が避けていた送別行爲そのものを描く。これらはむしろ魏晉の離別詩へ回歸しようとするものであった。官人の時期には定型的離別詩と彼獨自のそれとが平行していたが、官を退いてからは後者だけとなり、儀禮性から脱却して、文人どうしの交遊を反映するものとなる。

Ⅲ 部

「自送の詩——王維「送別」詩論考——」

王維の「送別」詩は歸隱する者を送別する詩であるが、實はそれは王維自身の歸隱をみずから送る、「自送」詩として解釋することが最も妥當であることを種々の根據を擧げて證する。

「李白「瀟陵行送別」考」

李白の「瀟陵行送別」詩は、李白自身が長安を去つて歸山するのを送る「自送」詩であると解すべきことを論じる。

「蘇武李陵詩考——離別詩の一つの源泉——」

蘇武・李陵の離別の詩は劉宋・顏延之の頃より表面にあらわれてきて、南齊に至つて離別詩に影響を與えるに至ること、しかしすでに鮑照以後かたちを整えていた離別詩にとっては決定的な影響を及ぼすには至らなかったことを、詩の分析を通して論じる。

* * *

離別詩の大きな流れを汲み取ろうとすると、あちこちに散りばめられた興味深い指摘の数々はこぼれ落ちてしまふけれども、以上、著者の意圖に沿うべく努めながら、各論考の骨子をまとめてみた。

著者は離別詩の展開を直接の對象としながらも、常にそれを詩全體との関わりのなかで捉えようとするので、離別詩以外の詩の諸相に関心をもっている讀者にも、それぞれの関心に引き寄せて得るところがある。たとえば評者は最近、「宦遊」ということを手がかりにして、初唐の時期に新しい階層の人々が詩作に加わるようになり、そこに生

じた新たな抒情が唱われるようになったということを考えてみたが（『宦遊と吏隠』（『中國讀書人の政治と文學』、二〇〇二年一〇月、創文社）、それは著者が「送別」と「留別」の分化を通して「從來とは異質の新しい讀者」（二四一頁）が登場したと指摘しているのと奇しくも一致する。

もつと大きな問題を挙げれば、詩における敘景に關心をもつ讀者にとつては、離別詩の展開をそのなかに敘景のいかに取り込むかという問題とからませて論じる著者の視點から、大きな示唆を與えられることだろう。

個々の指摘の斬新さを取り擧げていけばきりが無いが、全體を通して讀者が受ける感銘は別のところにある。すなわち、文學は様式を固めていく方向におのずと向かつて行きながら、一方でそこから離脱しようとする個性が常に生み出され、その二つの相反する動きがまるで生き物のようにせめぎ合いながら展開していくありさまが、離別詩を通してまざまざと描き出されていることである。文學のこのようなダイナミックな動態に逢着したのは、著者がもともと意圖したものではなかったかも知れないが、わたしたち

を文學に對する深い思念に誘うものであり、離別詩という個別の研究を越える大きなスケールを獲得している。

細部の敘述に至れば、いささかの違和感を覺えない箇所がないでもない。離別詩が形成されていく過程を跡づける著者は、建安時代を「まだ十分に詩の獨立した類別として確立されていなかった」（一九頁）と位置づける。たとえば劉楨の「贈五官中郎將詩四首」を取り上げて仔細に分析しながら、「離別の要素を濃厚に含みながらも、離別を主題とする詩では決していないのである」（一八頁）と結論し、「詩題のもつ意味の重さが改めて確認される」（一九頁）という。しかし詩題というものは、建安文人自身が付けたものなのだろうか。むしろ編纂の時點における編纂者の判斷が問題になるのではないだろうか。『文選』には「送別」の分類はない。それに近いものとして「祖餞」が立てられているに過ぎない。著者の論に基づけばすでに離別の詩が十分に成熟していた時期のはずであるのに、「祖餞」という類別のもとに曹植から沈約に至るまでの送別の詩が収め

られているのはどういうことなのだろうか。著者は「西晉に（また西晉に限って）流行した祖道詩が、離別詩の重要な源流であり、また一つの典型として無視しえぬ存在となっていたことを示すものだからである」（三八頁）と述べているが、説明を急ぐよりも問題は問題としてのこした方が、今後の理解を深める契機になるのではないか。著者は詩題に頼ることの危うさに留意しているにもかかわらず、本書全體を通して詩題を大きな手がかりにしているように見える。離別詩全體の流れのなかで、建安を離別詩という分野が確立される前の段階として位置づけるよりも、のちの詩が展開していく様々な要素がいずれも萌芽のまま、混沌としたまま、混在している状態として捉えた方が、建安文學の豊饒さを損なわないように思う。

讀む者の意表を突く新説といえば、第三部に收められた王維、李白の送別詩を「自送詩」、すなわち自分で自分を見送る詩であるとする新しい解釋であろう。この新奇な説を論證しようと著者はことばを連ねる。そのために精力が費やされて、「自送詩」であることによって生じる様々な

問題にまでは説き及んでいない。わたしたちが知りたくなるのは、「自送詩」なるものが盛唐に至つて出現したとしたら、それは離別の詩の系譜のなかでどのような意味をもつのだろうか、さらには現實を舞臺として作られるとされてきた中國古典詩にどのような新たな性格を賦與するのだろうか、という問題である。著者の今後の考察を待ちたい。

本書にはすでに赤井益久氏による書評があるが（『東方』二〇〇四年三月）、赤井氏はその冒頭で「犯軼^{はつえつ}」という古代儀禮を紹介している。神のよりしろを築いてそれをくずし、道中の無事を祈る儀式である（『周禮』大駟）。離別詩の文學以前の姿は、そのような豫祝儀禮におけることほぎだったのではないか。行く先の惡靈をお祓いて旅の安全を祈願する呪術的行爲に發し、やがて離別の悲哀を唱うものへと移行していくとしたら、古代習俗からどのように抒情詩にすり替わっていくか、文學が生成するプロセスにも離別詩の研究は廣がついていくだろう。

また離別の際の感情には、去る者・送る者との友情がもとになっている。離別の悲しみを唱うことは、兩者の間の

友情を唱うことにほかならない。としたら、離別詩は友情の文學の一分野でもある。友情という心のかたちなどのように形成されていったか、その問題を離別詩との関わりのなかで考察することも、今後の研究の一つに数えられよう。

別れといえ、日本の文學だったならば、まず男女の別れが文學の主題になるだろう。離別の文學も「友情の文學」を主とする中國と「戀愛の文學」を主とする日本との間で、當事者の關係が異なる。中國の離別詩では男女の別れはどのように唱われているのだろう。それは男性どうしの別れの場合とどのように違うのだろう。男女の別れの場合は旅に出るためよりも愛情の喪失による別れの方が多いだろうが、中國の離別詩には物理的別離とは別の、心情の別離を契機にした詩はないのだろうか。著者に聞きたくなることはまだまだ盡きない。このように様々な思いが生ずるということは、本書の内容の豊かさを證するものにほかならない。

（研文出版、二〇〇三年六月、本文四〇六頁、人名索引四頁）